

日本放送協会報

2022年4月11日 号 外

主 要 目 次

・第97回放送記念日記念式典 1

第97回放送記念日記念式典

第97回放送記念日記念式典を、3月18日（金）午前10時からLINE CUBE SHIBUYAで開催しました。

開 式

あいさつ 会長 前田 晃伸

来賓祝辞 渡辺 孝一 総務大臣政務官
赤羽 一嘉 衆議院総務委員長
大久保好男 日本民間放送連盟会長
平木 大作 参議院総務委員長（ご欠席のため司会代読）

第73回 日本放送協会放送文化賞贈呈式

職員表彰（会長賞）受賞者紹介

記念演奏 NHK交響楽団（弦楽合奏）
指揮：三ツ橋 敬子
曲目：ディヴェルティメント K.136（モーツァルト作曲）

閉 式



編集・発行 総務局

あ い さ つ



会長

前 田 晃 伸

NHK会長の前田でございます。

第97回放送記念日記念式典の開催にあたりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

本日はご多忙にもかかわらず、総務大臣政務官・渡辺孝一さま、衆議院総務委員長・赤羽一嘉さま、日本民間放送連盟会長・大久保好男さまをはじめ、皆さまのご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

また、本日は73回目の「放送文化賞」を、放送事業の発展や放送文化の向上に貢献をいただいた6名の方々にお贈りいたします。受賞される皆さまに心から御礼とお祝いを申し上げます。

放送記念日は、大正14年・1925年3月22日に、NHKの前身である社団法人東京放送局が、東京・芝浦の仮放送所から日本で初めてのラジオ放送を開始したことに由来して、昭和18年・1943年に制定されました。今回で97回目となります。

NHKは昨年、「新しいNHKらしさを追求」し「スリムで強靱なNHK」へと生まれ変わることを柱とした3か年経営計画を策定しました。その初年度を「改革実行の年」と位置づけて、さまざまな改革に取り組んでまいりました。すべての改革の土台となる人事制度改革をはじめ、「訪問によらない営業活動」に大きく舵を切った営業改革、本体との一体経営を行う基礎を固めたグループ経営改革、さらにはジャンル別管理の考え方を導入してコンテンツやサービスの改革にも着手し、大きく動き出した1年となりました。

今年は、「NHKは変わったな」と実感していただけるよう、一連の改革の成果を視聴者の皆さまの目に見える形でお示しする年、「改革実感の年」にしたいと考えています。その一つの象

徴として、4月の新年度番組改定では、注目度の高い夜の時間帯に、質の高い番組を編成いたします。また、インターネットのサービス「NHKプラス」では新たにテレビ向けのサービスを開始するほか、テレビを持たない人などを対象にしたインターネット活用業務の社会実証を実施いたします。インターネット上には大量の不確かな情報が溢れています。インターネットを含む情報空間で、正確で信頼できる情報を広くしっかり届けることは、NHKの大切な役割だと考えています。社会実証は、新たな「放送の将来像」を提示する重要な機会になりますので、結果はしっかりと検証して、得られたデータは関係者の方々とも共有してまいります。

放送と通信の融合が急速に進み、放送業界は激動の時代を迎えています。そうした状況にあっても、今後もNHKと民間放送の二元体制を維持・発展させることが、国民の知る権利に応え、健全な民主主義の発展に寄与するために重要だと考えています。NHKならではの多様で質の高いコンテンツ制作に経営資源を集中させ、「新しいNHKらしさ」を体現するコンテンツやサービスを提供するとともに、あらゆる既存業務を見直して「スリムで強靱なNHK」へと生まれ変わるため、抜本的な改革を目に見える形で、後戻りすることなく着実に実行してまいります。

そして最終的には、改革の成果を受信料の値下げという形で視聴者の皆さまに還元することをお約束いたします。

今後とも、NHKへのご理解とご支援をお願い申し上げますとともに、ご臨席の皆さまのご健勝を心より祈念し、私からのごあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



総務大臣政務官

渡 辺 孝 一

本日ここに、第97回の放送記念日記念式典が
 挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し
 上げます。

まずは、栄えある「日本放送協会 放送文化
 賞」を受賞される皆様に、心からお慶び申し上
 げます。

大正14年3月22日、NHKの前身である東京
 放送局が、芝浦の送信所からラジオの仮放送を
 開始しました。

以来、我が国の放送は、公共放送と民間放送
 の二元体制のもと、両者が互いに切磋琢磨しな
 がら、多様な放送番組を通じて、豊かな文化を
 育むとともに国民生活の向上に寄与してきました。

改めて、関係の皆様におけるこれまでのご尽力
 に、深い感謝と心からの敬意を表する次第です。

近年は、インターネットの普及や社会のデジ
 タル化により、特に若い世代を中心にテレビ離
 れの傾向が見られ、また、国民の情報収集の手
 段についても、世代や目的ごとに、多様化が進
 んできています。

しかしながら、メディアを取り巻く環境が大
 きく変化する中でも、公共の福祉のため、全て
 の国民に対して質の高い放送番組を提供し、文
 化水準の向上に寄与するという公共放送として
 のNHKの社会的使命はますます重要度を増し
 ています。

特に、国民の生命と財産を守る、正確かつ迅
 速な報道は、最も重要な社会的使命の1つです。

最新の新型コロナウイルス感染症の国内外の
 状況や、各地で発生している豪雪などの自然災
 害を踏まえれば、国民・視聴者へ安心・安全に
 関する情報を伝えることの重要性は、ますます
 高まっています。

こうした地域における放送ネットワークを維

持するためにも、引き続き、民間放送事業者と
 の連携・協力を積極的に進めていただきたいと
 考えています。

そして、放送だけでなく、インターネットを
 含めたあらゆる手段を活用し、きめ細やかな情
 報提供に一層取り組まれることを期待しており
 ます。

また、視聴覚障害のある方やご高齢の方を含
 む全ての視聴者が、放送の内容を理解し、必要
 な情報を得る機会が確保されることも重要で
 す。引き続き、字幕放送、解説放送及び手話放
 送の充実努めていただくことをお願いいたし
 ます。

世界に目を向けますと、ウクライナを巡る国
 際情勢など、めまぐるしく状況が変化してお
 り、我が国の動向や実情などを正しく伝えるこ
 との重要性が高まっています。NHKにおかれ
 ては、インターネット配信やラジオ放送も活用
 し、国際放送の一層の充実・強化が図られるこ
 とを期待しております。

NHKでは、昨年公表した中期経営計画に基
 づき、受信料の引下げやチャンネルの削減など
 の大きな経営改革が進められています。総務省
 としても、放送法の改正などを通じ、こうした
 改革が着実に実現されるよう取り組んでまい
 りたいと考えております。

最後になりましたが、皆様のご健勝と、我が
 国の放送の更なる発展を祈念いたしまして、私
 からのお祝いの言葉とさせていただきます。



衆議院総務委員長

赤羽 一 嘉

第97回放送記念日を迎えるに当たり、衆議院総務委員会を代表し、一言、お祝いのご挨拶を申し上げます。

初めに、本日、栄えある「日本放送協会 放送文化賞」を受賞される皆様、そして、会長賞を受賞される職員の皆様に、心よりお慶び申し上げます。

長年に亘り、わが国の放送事業の発展、並びに放送文化の向上に、多大なるご尽力を賜り、数々のご功績を残されましたことに、深甚なる敬意を表する次第でございます。

さて、わが国の放送事業は、大正14年3月22日、芝浦の送信所から、NHKの前身である東京放送局がラジオの仮放送を開始したことから始まりました。

この時の東京放送局の初代総裁であった後藤新平氏は、放送開始の約1年半前に発生した関東大震災に遭遇する中で、正確な情報を迅速に国民に伝える手段の必要性を認識したことにより、ラジオ放送の開始に熱心に取り組まれたと伺っています。

こうした災害時に、正確な情報を迅速に国民の皆様へ伝える重要性は、今日においても、いささかも変わるものではございません。いや、それどころか、近年、わが国は各地で、激甚災害が頻発しており、国民の皆様への命と暮らしを守るためには、正確な情報を、迅速、かつ、分かりやすく伝えることが、大変重要であることは、私自身、国土交通大臣として、全国の被災地を訪れるたびに痛感してきたところでございます。

NHKにおかれましては、近年、高齢者や障害者、外国籍の方などいわゆる災害弱者を含めた全ての被災者が、早め早めに避難行動に移れるように、地域に根差した正確な災害情報を、分かりやすく伝える工夫や改善の努力をして頂いておりま

すことに、改めて、この場をお借りし、心から感謝申し上げます。本当に有難うございます。

今後とも、引き続き、防災・減災が主流となる社会の実現に資する番組の制作や報道のあり方に、尚一層、注力して頂きますよう宜しくお願い致します。

NHKは、災害情報だけでなく、報道番組をはじめドラマやスポーツ、映画、文化芸術、ドキュメンタリーなど幅広い分野の放送により、お茶の間に、夢と希望と幸せを届け、家族の絆と一家団欒、そして、国民生活の文化水準の向上に寄与してこられました。更に近年、日本文化を世界に向けて紹介する番組が、日々、世界中の視聴者に届けられております。

昨年の東京オリンピック・パラリンピック大会では、新型コロナウイルス感染症の影響により、生の観戦ができない中、4K・8Kで臨場感のある放送を行う一方、NHKプラスで競技の同時配信や名場面の見逃し配信を行い、国内外にたくさんの方々の感動と笑顔を届けていただきました。

また、NHKが主催者として、1965年に設立した教育コンテンツの国際コンクールである「日本賞」は、設立以来、教育の可能性を広げる優れた作品に、数々の賞を贈り続けてこられました。現在では、世界中から、毎年、300を超える教育番組のエントリーがあり、本審査期間中に開催されるエントリー作品の上映会や、教育を考える様々なセッションにおいては、国内外から多くの参加者が集い、教育の価値などについて活発な議論がおこなわれています。

教育に関心のある全ての人のプラットフォームとして「日本賞」は、世界の教育コンテンツの質の向上、そして国際理解の促進に多大なる貢献をされていると承知をしているところでございます。

一方、近年、放送を取り巻く環境は、大きく変化しております。若い世代を中心にテレビ離れが指摘され、知りたい情報、見たい情報が、いつでも、どこでも入手できるインターネット経由でのメディア視聴が顕著でございますが、様々な情報が、多様な経路で伝わる、今の時代こそ、正確かつ公平な情報を国民の皆様にしっかり伝えていくことが、一層重要になると確信しております。

放送と通信の融合時代の下、NHKにおかれましては、インターネット活用業務に係る社会実証を実施する予定であると伺っております。

こうした新たな試みにチャレンジをなされ、世代を問わず全ての国民の皆様に対して、豊かで良質な放送番組を提供し、いつの時代においても、公共放送としての社会的使命をしっかり果たして頂き、わが国の放送文化の向上や、新たな文化の育成を図るなどの役割を、引続き、担って頂きたいと、強く念願するところでございます。

結びになりますが、本日ご列席の皆様様の益々の御健勝と御活躍を、そして、わが国の放送事業の健全な発展を、心よりお祈り申し上げまして、私の挨拶といたします。本日は誠にありがとうございました。



一般社団法人 日本民間放送連盟会長

大久保 好 男

日本民間放送連盟の大久保でございます。第97回放送記念日の記念式典にお招きいただき、ありがとうございます。まず、「日本放送協会 放送文化賞」を受賞される皆様、そして表彰を受けられる職員の皆様に心よりお祝いを申し上げます。誠におめでとうございます。

さて、今、世界の耳目はウクライナ情勢に集まっております。ロシアは国際法違反の侵略を続け、多数の民間人が犠牲になっています。愚かな行為を止めるには、正しい情報をより多くの人々に伝えて、行動を促すしかない。そうした使命感に基づいて、日本の放送事業者を含む世界のメディアが、今、現地で懸命に取材し、なにが起きているのかを伝えようと努力しております。これに対して、ロシアでは言論統制が強まり、ロシア軍の活動に関する虚偽情報の拡散を処罰する法律が成立しました。ロシアに住む外国人も対象になります。政府の公式見解に疑問を呈する報道は、全て違法行為として処罰される恐れがあります。

言うまでもなく、自由な言論、自由な報道は、健全な民主主義社会の基礎であります。メディアは取材者の安全を確保しながら、正確な情報をより深く、より広く世界に伝えていくことが求められております。私たち放送事業者も、このメディアの使命と責任を自覚し、事実に基づき真実を伝える誠実なジャーナリズムであり続けると、今改めて誓い合いたいと思います。

昨年は民間放送の誕生から70年の節目の年でした。放送の歴史は新しい技術を取り入れながら、進化を続けてきた歴史でもあります。今は経済社会のデジタル化、構造変化が加速しています。この変化にすばやく適切に対応しなければなりません。そして、NHKと民放の二元体制を堅持しながら、力を合わせて新しい時代の豊かな放

送文化を築いてまいりたいと思います。

最後に、NHKのますますの発展を祈念し、わたくしのご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

参議院総務委員長

平 木 大 作

(ご欠席のため司会代読)

第97回放送記念日を迎えるに当たり、参議院総務委員会を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、放送文化の向上や放送事業の発展への御貢献、番組制作や技術開発等への御尽力により、本日、放送文化賞及び職員表彰を受けられる皆様に対し、心からお祝いを申し上げます。

NHKの皆様におかれましては、豊かでよい番組をあまねく日本全国に提供するという社会的使命を果たし、国民の期待に応えてこられました。また、各地域からの情報発信、先端的な放送技術の開発など、多方面において成果を挙げておられます。

昨年夏に我が国で行われた東京オリンピック・パラリンピック大会、そして先日閉会した北京大会においては、放送やインターネット配信を通じて競技の魅力を臨場感あふれる映像と音声で伝えるとともに、手話や字幕によるユニバーサル放送に取り組み、多くの国民に感動を届けてくださいました。

また、「訪問によらない営業活動」への移行による営業経費の削減など、NHKが掲げるスリムで強靱な「新しいNHK」の実現に向けた取り組みを進めておられるほか、放送をめぐる環境が大きく変化する中、テレビを持たない人などに向けて、NHKのコンテンツや情報を提供する社会実証の実施を予定しているなど、新たな取り組みにも積極的にチャレンジされていると承知しております。

言うまでもなく、NHKの経営は、視聴者の皆様からの受信料によって支えられています。新型コロナウイルス感染症はもとより、緊張を増す国際情勢など、社会・経済が激しく揺れ動く中、NHKにおかれましては、公共放送の役割と責任

を改めて自覚し、正確で信頼できる情報を迅速に伝えていただくとともに、防災・減災報道の充実・強化、ユニバーサル放送の拡充など、視聴者に寄り添った取り組みをより一層推進されることを切に願っております。

今国会においては、NHK予算や放送法改正案の審議が予定されておりますが、参議院総務委員会といたしましても、NHKをめぐる諸課題の解決に資するよう、尽力してまいります。

結びに、NHKが信頼される公共放送として、国民・視聴者の負託に応えていくことを心より祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

第73回日本放送協会放送文化賞受賞者

つづく あいichirou
都 竹 愛一郎 氏

《名城大学理工学部電気電子工学科教授》

電波研究の第一人者として、放送局から視聴者にきれいな映像音声が届くよう、伝送技術の研究指導に取り組み、放送分野における国内外の標準化を進めました。地上デジタル放送の実現にあたっては、送信施設である東京スカイツリーの回線設計や場所選定にも関わり、またNHK放送技術研究所における地上テレビジョン放送の高度化技術に関する研究開発で運営委員会の座長を務めるなど、放送技術の発展に貢献しています。

ふじ い かつ のり
藤 井 克 徳 氏

《NPO法人日本障害者協議会代表》

視覚障害がある中、障害者団体のリーダーとして1970年代から活動。NHKの福祉番組に、企画、情報提供、調査協力などで長年にわたって協力してきたほか、2006年の「障害者自立支援法」制定以降は、番組にたびたび出演。東日本大震災後の「障害者と防災」や、相模原事件後の「優生思想をめぐる問題」などの重要なテーマをナビゲーターとして伝えるなど、福祉番組の先導的役割を果たしています。

はな やぎ いと ゆき
花 柳 糸 之 氏

《舞踊振付家》

『NHK紅白歌合戦』や『思い出のメロディー』など数々の歌謡番組において、50年以上にわたり振付を担当。伝統芸能で培われた豊富な知識・技術と自ら磨き上げた柔軟な発想でステージの表現を広げ、多くの視聴者に愛される歌謡番組を献身的に支えました。多くの歌手から信頼を集めるその人間性や情熱は、エンターテインメントの制作現場やスタッフに常に活力を与え続けています。

ます だ あけ み
増 田 明 美 氏

《スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授》

女子マラソン引退後、スポーツコメンテーターとして活躍。豊富な知識と軽妙な語り口で、女子マラソンの魅力を視聴者に伝えてきました。アトランタから東京まで7大会連続でオリンピックの解説者を務めたほか、東京パラリンピックでも解説やスタジオ出演で放送を支えました。また、連続テレビ小説『ひよっこ』のナレーションをはじめ、子ども向け、教養、バラエティなど幅広い番組で活躍し、視聴者の支持を得ています。

ピーター・バラカン 氏

《ブロードキャスター》

1974年の来日以来、堪能な日本語を駆使してテレビ・ラジオの第一線で活躍。FM『ウィークエンドサンシャイン』のDJを1999年から務め、古今東西の幅広い音楽を長年日本のリスナーに紹介する一方、NHK WORLD-JAPAN『Japanology Plus』では、深い洞察力と親しみやすい語り口で、前身番組も含めて19年にわたり、日本の文化を世界に向けて伝えるなど、国際社会と日本の架け橋として貢献し続けています。

み わ あき ひろ
美 輪 明 宏 氏

《歌手、俳優、演出家》

独自の美意識で60年以上にわたって活動を続け、2012年に77歳で『NHK紅白歌合戦』に初出場。その後4年連続出場を果たし、長崎での被爆体験や故郷への思いなどを込めた歌は大反響を呼びました。大河ドラマ『草燃える』『義経』や、連続テレビ小説『花子とアン』での語り、さらにEテレ『にほんごであそぼ』『美輪明宏 愛のモヤモヤ相談室』への出演など、多彩な活躍で番組を支え続けています。

放送文化賞受賞者のことば

つづく あいいちろう
都 竹 愛一郎 氏

(名城大学理工学部電気電子工学科教授)

このたびは、放送文化賞という歴史のある素晴らしい賞を頂くことができまして、誠に光栄に存じます。

わたくしは、電子工学の技術者としてテレビ放送の伝送方式の研究をしておりますが、テレビとのお付き合いは長くて、わたくしが生まれた昭和30年までさかのぼります。当時、放送が始まったばかりでしたので、テレビの受像機の値段は、サラリーマンの給料の5か月から10か月分くらいと非常に高価な電気製品でして、庶民には高嶺の花でございました。

そんななかで、わたくしの父親、電気の技術者でしたので、テレビのキットを買ってきてテレビを作ってくれたんですね。それで、わが家では早くからテレビを楽しむことができました。当時の人気番組だった大相撲の中継の時間になると、近所の人がわが家にテレビを見に集まってきたことが思い出されます。

大学を出て、郵政省の電波研究所というところに入りまして、本格的にテレビの研究を始めたわけですが、1990年代に入って、アナログのテレビ放送をデジタルにするというビッグプロジェクトが始まりました。このプロジェクトは、NHKの放送技術研究所の方が中心になって進められましたが、わたくしもそのお手伝いをさせていただきました。

そのデジタル放送も進化を続けておりまして、2018年には衛星によるスーパーハイビジョン放送、いわゆる4K8K放送が始まりました。この4K8K放送は、高画質で臨場感あふれる映像を楽しむことができますので、自宅にいながらにして旅行に行った気分を味わうことができます。昨今のコロナ禍の中にあって、外出ができない、旅行にも行けないという非常に息苦しい生活を強

いられておりますけれども、こんなときこそ、この4K8K放送を楽しんでいただければと思います。この4K8K放送をより多くの人に、手軽に楽しんでもらえるように、現在の衛星放送に加えて、地上波での伝送方式を現在開発中でございます。ご期待ください。

これからも放送技術の発展に貢献できるよう努力してまいりたいと存じます。本日は誠にありがとうございました。



はな やぎ いと ゆき 氏
花 柳 糸 之 氏
(舞踊振付家)

花柳糸之です。よろしくお願いいたします。

本日は、大変名誉ある賞を頂き、もう今、胸がいっぱいでございます。本当にありがとうございます。

わたくしは、番組作りの裏方として長年にわたり、多くの裏方の皆さんと一緒に番組を作ってきました。今回、裏方として光を頂いたことが、本当に、本当にうれしく思います。

また今後とも、裏方の皆さまと一緒に番組作りをして、お役に立ちたいなと思っております。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



ピーター・バラカン 氏
(ブロードキャスター)

予想以上にちょっとドキドキしてますけれど、本当にこういう賞を頂けるのはとてもうれしいものです。

僕にとって、ラジオ番組を持つことが長年の夢でした。学生のときからです。その夢がかなったのは1980年ですから、もう40年以上になります。そのうちの35年ほど、NHKの主にFMで、番組をいろいろと担当してきました。大抵2年とかそのぐらいで番組が終了することが多いんですけど、今担当している『ウィークエンドサンシャイン』という番組は1999年からです。そんなに長く続くものではない、具体的にはそう考えていたわけではないですけど、まさかこんなに長く続くとは夢にも思っていませんでした。非常にうれしいことなんですけれど、番組に起用してくれたプロデューサーにまず感謝したいです。

それから、放送番組とはやっぱり継続がすべてだといっていいぐらいだと思います。新しい番組が育つ前に打ち切りになることがとても多いんですけど、番組を継続してくれて、ちゃんと育成してくれるっていうのは、編成の方々に対する感謝もやっぱりあります。僕の場合は、わりと競争相手のいない時間帯の番組があるので、そのせいもあるかもしれませんが、本当に感謝しています。

Japanologyのほうは、2003年から『Weekend Japanology』が始まったものですから、もうすでに僕が50歳以上でした。そういうときにやはり起用してくれたプロデューサーに改めて感謝します。

2010年ぐらいからですかね、Japanologyが本当に海外で見られてるなという実感が少しずつ湧いてきました。最初は、アメリカのオレゴン州ポートランドの町を歩いているときに、2人の高校生とすれ違いました。「あなた、ピーター・バラカ

ン？」って言われて、「そうだけど、それがどうした？」って言ったら、「うちの学校で日本語を習っていて、先生はJapanologyを教材に使っています。あなたのこと、よく知ってる」というふうに言われて、びっくりしたのを覚えています。その後、例えばカンボジアの遺跡を巡っているときに、隣りにいた人から「あんた知ってるよ」って言われたり、あるいはJapanologyの撮影のときにも、いろんな方から声を掛けられたり、思わぬところで「やっぱりこの番組は見られてるんだな」と感じます。日本に興味を持った人たちが、たまたまどこかインターネットで知って、それで番組の内容が面白いので、どんどんいわゆるビンジウォッチングをする人たちも、中にいます。

いつも僕を褒めてくれる人がいると、「実際に番組の中身を作っているのはNHKの制作のチームだから、僕はあくまで画面に顔を出してるだけだ」と言うんですけど。僕に好感を持ってくれる人がいるっていうのは、おそらくJapanologyに関しては、常に客観性を失わないようにという意識を持っています。また、ラジオでもテレビでも、できるだけ物事を分かりやすく簡潔に言いながらも、相手の知性を決して過小評価しないようにという、そういう意識を持っているので、おそらくその気持ちが届いているのではないかと思います。

ラジオ番組を地道に続けること、また、『Japanology Plus』もできるだけ続けることが、僕の唯一の野心というか夢というか、そういうものですから、ぜひ今後も続けさせていただければと思います。今日はありがとうございます。



ふじ い かつ のり
藤 井 克 徳 氏
(NPO法人日本障害者協議会代表)

今回、一番うれしかったのは、人権を守る活動や事業を「放送文化」の対象として評価してもらったことです。私の喜びを超えて、日本全体の障害分野へのエールと考えております。

私とNHKの関係を振り返ってみたいと思います。かれこれ40年近くになります。当時、私は日本の共同作業所づくりの初期段階に関わっていました。共同作業所というのは、一般の会社では働けない重い障害者のための働く場で、無認可作業所とも言われていました。最終的には6千か所を超える大きなムーブメントになったわけですね。このムーブメントの後押しをしてくれたのがNHKでした。

そして、東日本大震災。このときはNGOと組んでNHKの福祉班がずいぶん頑張ってくれました。大切な調査も行われました。その中の一つで、障害者の死亡率が全住民の死亡率の2倍だったということが判明しました。この数字は国会でも取り上げられ、また政府の防災政策の指南役の一つになったと思います。この数字を元に、当時、スタジオで何度かディスカッションが行われ、厚生労働大臣にも来てもらったことがあります。

また、戦後70年、2015年でした。番組として何を考えるか、私は提言させてもらいました。ナチスドイツ下での障害者への蛮行、これをぜひ取り上げてほしいと。NHKも同意してくださり、そしてドイツに入りました。たくさんのインタビューを、もう今では聞けない貴重な証言です。これらを元に番組が作られていきました。『ハートネットTV』の枠を超えて『ETV特集』でも放送されました。“優生思想”の恐ろしさを、史実に沿って改めて社会に伝えるということでは、大きな意味があったのではないのでしょうか。

NHKとの関係の一部を紹介してきましたが、

これらを通して感じることがあります。「話し上手は聞き上手」という言い回しがあります。私は、やはりいい番組作りは聞き上手から始まると考えます。この点で、NHKの福祉番組班はいい実践を重ねてきたように思います。障害者を含め、声なき声、小さな声、ここにどれくらい耳を傾けられるか、これからも磨きをかけていただきたい、期待します。

さて、これから10年、15年経ったときに「あのNHK放送文化賞受賞者のそうそうたる顔ぶれの中で、ちょっと異色の存在がいた。でも、なるほど、あの藤井に賞を授けて良かった。間違いじゃなかった」と、こう言ってもらえるようにしたいと思います。また、明日から仲間たちと歩み続けます。今日はありがとうございました。



ます だ あけ み 氏
増 田 明 美 氏

(スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授)

このたびは、素晴らしい賞を受賞させていただきました。どうもありがとうございます。受賞された方々の顔を見て「わあ、すごい賞を頂けたんだ」って、なんか実感が湧いてきました。

去年、東京オリンピック・パラリンピックの放送に携わらせていただきましたけれども、コロナ禍の中で、選手の皆さんが自分に負けずに、大活躍をしたおかげだと思っています。

私はこの賞を頂けて本当にうれしいのは、ずっと尊敬し続けている永六輔さんと同じ賞を頂けたんだって、しかも頂いた年齢が58歳ということで、それも同じなんですね。

永六輔さんのように、ラジオただけけれども、おいが伝わってくるようなお話のしかたに、ずっと憧れていました。で、あるとき永さんに「どうしたらそういうお話のしかたができるんですか?」と伺いましたら、「うんうん、僕はね、会いたいと思った人がいたら、どんなに遠くでも行っちゃうんですよ。そこで会って感じたことをマイクの前で話しているだけなんですよ」とおっしゃいまして。そのあとも、何度も一緒に歩かせていただいて、たくさんのことを学んできました。

そのうちにマラソンの解説の仕事も頂くようになりまして、やっぱり「あっ、そうだ」って、現場に足を運んでたくさんの材料を集めてという取材の原点も教えていただいたと思います。最近、あまりにも小ネタが多すぎて、プライベートのことなんかも言ってしまって問題発言なんかもしていますけれども、でも、本当にこの賞を頂けてうれしいです。

東京オリンピック・パラリンピックの前に、NHKのラジオのお仕事で『増田明美のキキスギ?』という番組、「あんた、しゃべりすぎ」って言われましたが、そこでスタッフの皆さんと一緒に盛り上げていったこともよかったのかなと思います。

2017年には、岡田恵和さん脚本の朝ドラ『ひよっこ』のナレーションのお仕事を頂いてとてもうれしかったです。最初、私はなんか気取ってしゃべっていました。そうしたら、ディレクターの方が「増田さん、マラソンの解説みたいに、どうでもいいことをペラペラしゃべる、あんな感じでやってよ」って言われて、ちょっと肩の力が抜けて、自然体でリラックスできました。「この調子でいったら、大河ドラマ『いだてん』くるかな?」と思いましたが、きませんでした(笑)。

本当にいろんな面でまだまだ「ひよっこ」の私ですが、この賞を励みにこれからも失敗を恐れずに、いろんなことに攻めの姿勢でチャレンジしていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。今日は本当にどうもありがとうございました。



みわ あき ひろ
美 輪 明 宏 氏
(歌手、俳優、演出家)

美輪明宏でございます。今日は、本当に結構な賞を頂きまして、身に余る光栄で感激しております。ありがとうございました。

わたくしがNHKさんと縁がつながったのは、故郷の長崎でNHKの支局がございまして、そこに放送合唱団があり、その放送合唱団に入れられてね。わたくしがまだ中学生で変声期前でボーイソプラノでしたので、ソプラノの部類に入れられてまして、そしてソロでも歌わせていただいて、それが長崎のNHKさんとのつながりでした。

終戦直後でございましたけれども、それから東京へ参りまして、国立の音楽学校に行きながら、銀座のシャンソン喫茶で歌ってるところへ、NHKさんの職員の方が見えましてね。今度テレビジョンなるものができて、家庭でニュース映画を見られるようなシステムが開発されて、実験放送をやるんで手伝ってくれないか?と問われました。

そして、内幸町にまだNHKがございましたところに、わたくし参りまして、そのスタジオへ入りましたら、とっても小さい狭いスタジオで、そこへ大きなカメラがありましてね。モニターが当時はなかったんですね。ですから自分がどう映ってるのか見ることができなくて。でも、シャンソンの「ラ・メール」という曲と「小雨降る径」という曲を2曲歌わせていただきまして。それがこの東京のNHKさんとの最初のつながりでした。

それからはバラエティや何かでいろいろ出させていただいて、『夢であいましょう』などにも出させていただいて、『ジェスチャークイズ』なんていうのもございましてね、それにも出させてもらって。

やがて道がひらけましてね。いろんなものに出させてもらって。先ほどの紹介にもありましたように、ドラマの『義経』で修験者の役、そして『草燃える』では陰陽師の役、いずれも怪しげな役ばかりでございますけど、やらせていただきました。

ナレーションのほうでは『花子とアン』で「ごきげんよう」なんて言っているその言葉が、おかげさまで流行語大賞にも選ばれて。とにかくいろんなことやらせてもらって、『SONGS』という歌番組では、9回も出させてもらいました。好きな歌を歌わせてもらって、特集も組んでいただき、本当に身に余る光栄でございます。

『紅白歌合戦』にいざなわれましてね。4回出させてもらって、そのうちの2回、「ヨイトマケの唄」というわたくしの作品を歌わせてもらって光栄でした。

今も、お子さんの番組だとか、身の上相談の番組を設けてもらって、それをやらせてもらっております。本当にもう70年近く、今年で86歳になりますけれども、そのうちの2年は長崎のNHKさんで、その後70年はこちらのほうでご厄介になって、とても幸せです。

今日は、素晴らしいこういう栄えある賞を頂き、身に余る光栄でございます。これからもお見捨てなく、またあしたも番組の収録がございませう。どうぞ末長く見守っていただきたいと思っております。本当にいろんなことを思い出しますと、万感身に心に、とにかくもう言葉が出てこないぐらいに感動し、胸がいっぱいでございます。これからもよろしくご指導、ご守護をお願いいたします。本当にありがとうございました。